2022年９月４日 聖霊降臨節第14主日礼拝

メッセージ「くすぶる灯心の火を消さず」　　牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 12章1-12節

９ 月に入り、夏の猛暑も幾分か和らいで来たように感じていますし、朝晩には秋の気配も感じるようになってきました。しかし、気候は落ち着かず、台風 11 号がまた沖縄の方に来ていますし、台風から離れた所でも、激しい雷や突然の大雨などが何度も降っています。「ゲリラ豪雨」という言葉もいつの間にか、すっかり耳になじんできました。かつては「集中豪雨」と呼ばれていた気がしますが、それが「局所的な集中豪雨」となり、いつしか「ゲリラのような豪雨」と呼ばれるようになったのだと思います。

「ゲリラ」というのは、改めて調べてみると、スペイン語で「小さな戦争」「小さな戦闘」という意味なのだそうです。国民軍を組織して圧倒的な強さを誇っていたフランスのナポレオン軍が、スペイン戦争の際に苦戦したのが、現地のゲリラ兵たちでした。それこそ戦国時代の合戦のように、兵隊同士が人里離れた所で戦った場合には、勝敗が明らかになるのも早そうですが、村の中や町の中などで、誰が非戦闘員で誰が戦闘員かの見分けもつかない中、突然襲撃されることを繰り返すと、組織軍は少しずつ兵力をそがれていってしまいます。そのようなゲリラ戦に対抗するということで、一般人を巻き込む形での爆撃など、大量破壊、大量殺戮につながって来たのだと思います。

「正規の組織軍は、ゲリラには勝てない」ということは、ベトナム戦争を見ても、アフガン戦争を見ても、イラク戦争を見ても明らかです。組織がない分、戦争の終わりを告げることもできず、延々と泥沼化してしまいます。もはや現代の戦争に勝利はなく、あとに残されるのは破壊と混沌、無秩序だけ、というのが現実なのではないでしょうか。だからこそ戦争は起こしてはならないのであって、ロシアとウクライナの戦争はじめ、世界各地で起こっている紛争なども、一刻も早く終結させなければなりません。

人々による「小さな戦闘」、民衆による武力抵抗というのは、近代国家以前の大昔から世界各地でありました。今回の聖書のお話には、聖書協会共同訳では「ぶどう園と農夫のたとえ」という小見出しが付けられていますが、そこにも戦争ではないものの、農夫たちによる農園主への抵抗の姿が述べられていました。イエス様がこのたとえ話を用いて語り掛けられた相手は、前の 11 章からの続きとして

「祭司長、律法学者、長老たち」（11：27）とされています。そして、このたとえ話に登場する「ぶどう園の主人」は「天の神」、「ぶどう園」は「イスラエル」。主人に反抗する悪い「農夫たち」は「イスラエルの宗教指導者たちやユダヤ教徒たち」で、主人から派遣されて迫害された「僕たち」は、ヘブライ語聖書に登場する「預言者たち」。そして最後に主人から派遣され殺される「愛する息子」は、神の子であり十字架につけられた「イエス・キリスト」であるとして、このたとえ話は、祭司長、律法学者、長老たちなど、当時の宗教指導者たちへの当てつけとして、イエス様が語られたのだと理解されて来たのではないかと思います。

しかし、「神の愛する一人息子が、天から派遣されて、殺される」というのは、あくまでも歴史の中を生きられたイエス様の死と復活の後に成立した「キリスト教」の理解です。落ち着いて考えてみますと、ユダヤ教徒であったイエス様自身が、「自分は天の神から派遣された最終的な息子である」と言い、「私のことを理解せずに殺してしまうあなたたち農夫は、やがて主人によって打ち殺されるだろう」と、当時の宗教指導者たちに向かって語ったとは考えられません。むしろ、この話は群衆たちそのものに対して語られたたとえ話が、後の時代の福音書記者たちによって、宗教指導者たちに対する批判的な文として、編集して書き記されたのだと考える方がふさわしいと思います。

それではこのたとえ話を、2000 年前の当時の群衆たち、ガリラヤの貧しい農民たちは、どのように聞いたのでしょうか。「農夫たち」と訳されている言葉は、聖書協会共同訳の脚注にもありますが、自分の農地を持たない「小作人たち」です。当時のガリラヤの農民たちは、重税に苦しめられていました。仮に自営農民と言っても、いつでも小作農や日雇い労働者や奴隷に転落する瀬戸際にいましたし、小作人になると、収穫の 3 分の 1 から 2 分の 1、ひどい場合には 3 分の 2 も土地の賃借料として要求されたそうです。

一方の「ぶどう園の主人」とは、高い小作料で小作人たちを搾取している大土地所有者です。新しく「ぶどう園を作る」とは、即ち「誰かの土地を取りあげて自分のものにする」ということを意味していました。つまり、自営農民たちから借金の抵当として土地を奪い、それらの土地を合併することで広大な土地を確保すると、そこに「垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て」（12：1）るような大規模ぶどう園を作り、何人もの小作人たちを働かせたということです。それまで自営農民たちが自給するために栽培していた麦などの穀物畑を、ぶどう園に造り変えたのは、ぜいたく品・販売品となるワインを作る方が儲かったからでした。

そのような「主人」たちは、「不在地主」として幾つもの土地を所有していました

ので、各地の「ぶどう園」や領地、不動産を巡回して見回る必要がありました。それが冒頭に記されている「（ぶどう園を）農夫たちに貸して旅に出かけた」（12：1）という言葉です。この一文を聞いただけで、群衆たちは贅沢な暮らしをしている金持ちの主人と、その下で搾取されて苦しめられている小作人や奴隷たち、という自分たちの馴染みの情景を思い浮かべたことでしょう。

次に話は収穫の時に移ります。不在地主の主人は収穫物の取り立てに、僕を送りますが小作人たちによって暴力を振るわれて追い返されます。それを 3 回以上にわたって繰り返した後（12：2－5）、最後に「息子なら敬ってくれるだろう」（12：6）と考えて、息子を送りますが、その息子も殺されてしまいます。小作人たちは「跡取りである息子を殺せば、相続財産は我々のものになる」（12：7）と相談したとあります。確かに、当時のラビ法では「一定期間相続権が主張されない土地は『所有者無し』と見なされて、最初に所有を主張した者に所有が認められる」可能性がありましたので、このような企ては、小作人たちが先祖伝来の土地を奪い返す企てとして、現実的に考えられ得るものでした。

歴史の中を歩まれたイエス様が、実際に語られたこのたとえ話は、8 節か 9 節までで終わっていて、10 節以降は、マルコやマタイ、ルカといった後の時代の福音書記者たちが、その時代のユダヤ教の指導者たちに対する批判的文脈の中に、編集し書き加えた部分だと考えられています。仮に 8 節までなら、「小作人たちが地主の息子まで殺す」という衝撃的な事件、農民一揆の話ですが、「さて、ぶどう園の主人は、どうするだろうか」という 9 節前半までならば、どうでしょうか。イエス様から問いかけられた聞き手の群衆たちは、様々な連想をしたでしょうが、恐らく「（この主人は）戻って来て、小作人たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない」という 9 節後半の言葉を待つまでもなく、そのような結末を予想しただろうと思います。

実際、貧困と格差にあえぐ当時の農民たちによる反抗、「武力蜂起」「農民一揆」は、各地でいくつも勃発しては、その度に武力によって鎮圧されていました。ですから、聞き手たちはそのような暴力的手段が解決をもたらさないことも、よく分かっていたに違いありません。「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイ 26：52）。その事を、人々は身をもって知っていました。それにもかかわらず、このたとえ話は、イエス様の語られた力ある言葉、説得力があり、人々の心に残り、励ましや慰めを与えて力づけてくれる言葉として、名も無き群衆たちの口から口へと語り継がれ、約 40 年の後に福音書に書き記されるに至りました。それは何故でしょうか。

もしもこのたとえ話のメッセージが、単に「抵抗しても無意味だ」という虚しいも

のであれば、それは人々の心にも残らず、文字にも残らなかったはずです。このたとえ話のメッセージの核心はどこにあるのでしょうか。今日の招きの詞は「イザヤ書」42 章の言葉でした。この地に神の御心である公正をもたらすために、神から遣わされた「主の僕」……。その「彼は叫ばず、声を上げず、巷にその声を響かせない。傷ついた葦を折らず、くすぶる灯心の火を消さず、忠実に公正をもたらす。彼は衰えず、押し潰されず、ついには、地に公正を確立する」と謳われています。何だか変ではないでしょうか。正しいことを大きい声で叫び、巷に声を響かせ、力強く立派で、決して揺るがず、強固に立ち続けることで、公正な社会を確立するというなら分かりやすいのですが、全てがその逆です。「叫ぶことも声も上げることもできない」で、「もともと細い葦の茎は傷ついていて、ろうそくの火は今にも消えそうにくすぶっている」というのです。

しかし、それで終わりではありません。むしろ「傷ついているけれども折れない」「くすぶっているけれども消えない」「彼は衰え、押しつぶされそうになっているが、倒れない」ことによって、神の御心は実現される。新約聖書の中にも「私は弱いときにこそ強いからです」（2コリント 12：10）というパウロの言葉が記されていますが、神様の「力は弱さの中で完全に現れる」（2コリント 12：9）という不思議な現実が、確かにあるのだ、ということを、古代の預言者も、イエス様も、そしてパウロを始め、歴代の教会の人たちも、身をもって示してきたのではないでしょうか。

イエス様は「体は殺しても、命（魂・自分自身そのもの）を殺すことのできない者どもを恐れるな」（マタイ 10：28）とも言われています。イエス様の言葉を聞いた2000 年前の群衆たち、貧困と格差に押しつぶされそうになっている農民たちは、農園の主人から様々な抑圧を受けて、苦しめられても、自分たちの抵抗の魂は決して消え去ることはない。暴力に対して暴力で抵抗することはできないけれども、神様が共にいて自分たちの尊厳と生活を守り生きていく「第三の道」が、どこに見出せるはずだ。そのようなメッセージを受け取ったのではないでしょうか。

イエス様から 2000 年を経た今、現代を生きている私たちは、今なお多くの課題、問題の中にあります。人々の間には憎しみがあり、対立があり、戦争があります。そのような中にあっても、決して絶望するのではなく、共に活かし合う「第三の道」を諦めることなく探し続けること。たとえ、ろうそくの火は今にもくすぶっていて消えそうであったとしても、それでもなおその「くすぶる灯心の火」を消さないように、工夫して灯し続けること。そこに神様の力が共に働いて、導かれていくのだということに信頼して、今日もここから神様によって背中を押されて歩み出していきます。